

農 家 庭 に 関 す る 研 究

伊藤精悟・佐々木邦博・小山泰弘

信州大学農学部 空間利用整備学講座

Study on the Farmer's Garden

Seigo ITOU, Kunihiro SASAKI and Yasuhiro KOYAMA

Laboratory of Landscape Architecture, Department of Forest Science,
Faculty of Agriculture, Shinshu University

In the rural areas of Japan, the farming styles and life have changed since after the war, and the uses of farmer's garden have changed. This phenomenon concerns the change of landscape. And so, we made a survey by questionnaire, at Ôgaya district near our university, to understand the present condition of farmer's gardens and their changes. As a result, it became clear that the garden for work changed to one for life in various styles. All of the farmers who filled out the questionnaire had gardens of this type, and they can be classified from various angles. There were many kinds of trees and flowers there and it shows various plant-collecting hobbies. On the other hand, there were hedges and concrete block walls enclosing some gardens on the boundaries of housing sites, where originally there were few obstructions of the view. The whole analyses indicate the increase of spare time and the tendency toward more privacy in farmer's lives.

(Jour. Fac. Agric. Shinshu Univ. 26 : 129-149, 1990)

摘 要

農村において農業形態、生活は戦後大きく変化してきたが、農家の庭もその意義を変えてきた。このことは農村集落の景観の変化につながっていく問題である。そこで現在の農家の庭の状態を把握し、変化の様相を探ることを目的とし、伊那市西箕輪の大萱集落でアンケート調査を行なった。その結果明らかになった点は、現在の農家の庭が、かつての作業のための庭の姿とはまったく異なり、多様な姿を見せ、憩いの場へと変化したことである。回答のあった農家すべてに趣味的な庭造りが存在し、いろいろな角度から分類された。庭木や草花の種類と数が豊富であり、収集趣味が窺える。またかつて遮蔽する障害物をあまり設けていなかった宅地の境界には生垣、ブロック塀が多くみられ、庭を囲い込むようになってきている。これらのことは現在の農村生活において趣味の現われる余地が大きくなり、そしてまたプライバシーが重んじられるようになった結果だと考えられるのである。

はじめに

農村景観は近年、大きく変わりつつあるように感じられる。都市近郊部の変化は住宅地開発の進行によって起こっている場合が多く、山村部では人口過疎による農業の衰退と農地の荒廃によって変化している。安定した農村景観に見える地域でも、兼業による農業労働の集約化によって、大型機械の導入とこれに対応する農地の基盤整備によって変化している。こうした農村景観の変化は農地の状態、水路や道路の整備、山林の開発と荒廃など様々な面に現れている。日本の農村景観は自然に適応し、安定した環境を作ってきた長い歴史的産物である。この農村景観の急激な変化は、環境の様々な破壊を伴っている場合も多い。しかし、農村住民の生活の場であり、この変化も住民自身が選択したものであると考えられる点で、新たな現在の環境の安定が作られていると言える。農村景観の変化を様々な地域で、様々な面でとらえ、以前の安定状態、現在の変化と安定の流れの中で見ていくことが大切であろう。

ここでは農村景観の中で庭の実態をとらえることにしているが、個々の住民の考えと生活が景観の変化の大きな部分として顕著に見られるところである。集村の場合、庭の集合として集落の景観を彩るものであり、草花の彩り豊かな集落景観が多くなっているようである。これも個々の住民の生活のゆとりと楽しみが増えていることを示すものだろう。しかし、自動車交通の発達集落内道路の住民利用を狭め、同時に庭が住居環境保護の防壁ともなっている。

従来の農家庭の研究は、地理学の分野から気候との関係として屋敷林が取り上げられることが多く、建築学の分野からは民家の屋敷配置の中で取り上げられることが多かった。これも農家庭が一般の住宅庭とは異なり、趣味や戸外室的な場というより、自然環境への適応の点、農作業の仕事や農業経営上に必要な場、集落の交際の場という点に比重が大きかったということであろう。造園学の分野から農村景観の一要素として、また、屋敷林などの環境機能などの点で研究が進められている。しかし、今日の農家庭は過去の自然環境への適応や仕事庭の性格を大きく変えてきており、住宅生活と趣味の場の性格を強めている。しかし、住宅庭園とは異なり、農家庭としての独自性も持続させている点と趣味の持ち方も植物の栽培山野の豊富な材料など庭づくりの恵まれた条件がある点で、造園学の研究課題として興味ある対象である。

この農家庭に関する研究は信州大学農学部の学生実習である1986年後期の造園演習に南箕輪村沢尻集落の農家庭の調査を取り上げたことに始まる。続いて、1987年造園演習に今回まとめた伊那市大萱集落の調査を行った。このアンケート調査結果を1988年の造園演習の材料として分析作業を進めた。農家庭の外観の実態調査との対応はできていないが、アンケート調査の結果から、興味ある農家庭の実態が明らかになってきたので、ここで事例調査結果の第一段階の分析として明らかにするものである。

1. 調査の目的と方法

農家庭は屋敷建物とともに各農家の生活と農業経営の拠点として作られてきた。農業形態、

農村生活は第2次世界大戦後、大きく変化してきたが、これによって農家庭の意義も変化し、その形態を変えてきた。すなわち、農業の機械化や自動車交通の発達、農民の兼業によるサラリーマン化、集落の旧来、新来の住民の混住化などによって生産の場から生活の場、趣味の場に意義の重点を変化させ、農家庭の様相を変えてきている。しかし、個々の農家によってこの変化の受け止め方は必ずしも同一ではなく、家族それぞれの個性による相違もあり、農家庭の様相は多様なものである。現在の農家庭の多様な実態をとらえ、生活と趣味の庭としての展開の条件とともに、農家庭の変化の原因となった農業、農村生活の現在の状況との関連を考察し、農家庭の集合による集落景観やその周囲の環境への連続としての全体的な農村景観の美しさや豊かさの育成の知識としていきたい。

農村集落はその置かれた位置によって様々な状況にあるが、都市近郊にあって都市の中に飲み込まれてしまったり、山村の極端な過疎地で生活のゆとりのない地域では、周囲の環境との関連が失われたり、趣味的な庭づくりができなかったりすることで、調査目的にはふさわしくない。農村景観が保たれ、また、多くの農家の生活が安定している地域で、農村景観に連続する可能性を持った趣味的な農家庭を見出すことができるだろう。また、集落としての纏まった景観として農家を集落の範囲でとらえ、集村を最初に取り上げる。事例として、信州大学農学部に近い伊那市大萱集落の範囲の農家庭を取り上げた。

調査方法は各農家にアンケート用紙を配付し、これにできるだけ世帯主に回答をしてもらって、後日回収に回ったものである。アンケートの内容は1、家族について、2、庭との関係について、3、宅地内の建物について、4、庭づくりについて、5、宅地の周囲への関係について、6、農作業についてという6項目に渡るものである。

1、家族については家族構成、構成員の職業、農作業の分担状態、趣味を聞いており、2、庭との関わりについては庭を含め敷地の利用とその程度、利用する家族の構成員を聞いている。3、宅地内の建物と施設については建物の種類、建設時期、過去の存在時期を聞き、その見取り図を描いてもらった。4、庭づくりについては、庭づくりの家族の構成員、庭の形式、意図、庭の構成要素、その入手方法と時期、池の目的と取水、生け垣の種類、大きさ、効果、庭木の種類と数、草花の種類と栽培、それぞれの手入れ方法、鉢植えの種類、数について聞いている。5、宅地の周囲への関係については、居住時期、宅地面積、所有耕地、宅地隣接耕地の所有と宅地の拡大、隣接地の状態、境界の状態、立地条件について聞いている。6、農作業については、季節による作業の種類と作業場所について聞いている。以上の細部にわたる質問項目のアンケート用紙を作成した。

アンケートの各戸配付は1987年12月末に行い、数日後に回収した。配付数は71、回収数は41である。

2. 調査地の概要

調査対象とした農村集落は伊那市西箕輪大萱集落である。伊那市の北西、標高約780mの地点にあり、西から東に流れる、つまり木曾山脈から天竜川に注ぐその支流河川により形成された扇状地の扇央部に位置している(図-1, 2)。大萱は清水川の両岸に発達した集村であり、畑作を中心とする農家により構成され、江戸時代以前から続く古い集落である。

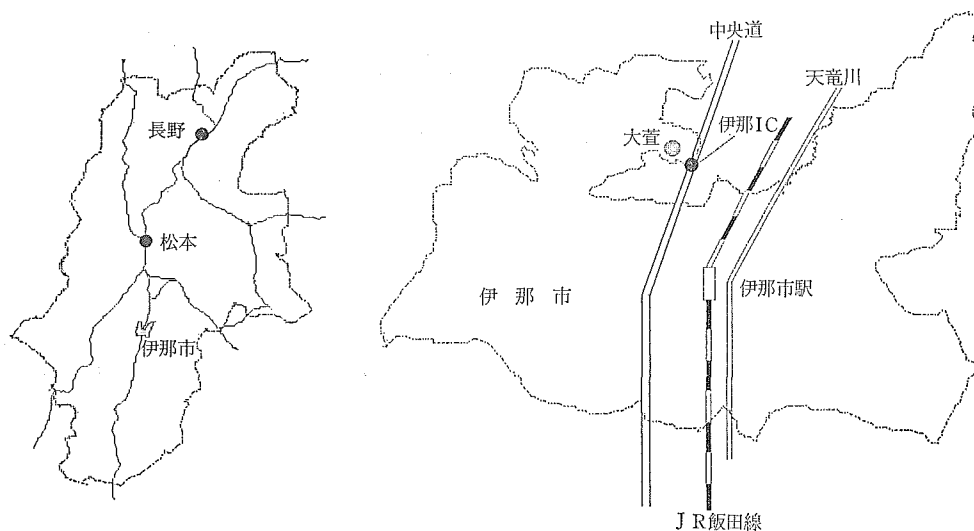


図-1 事例地の位置

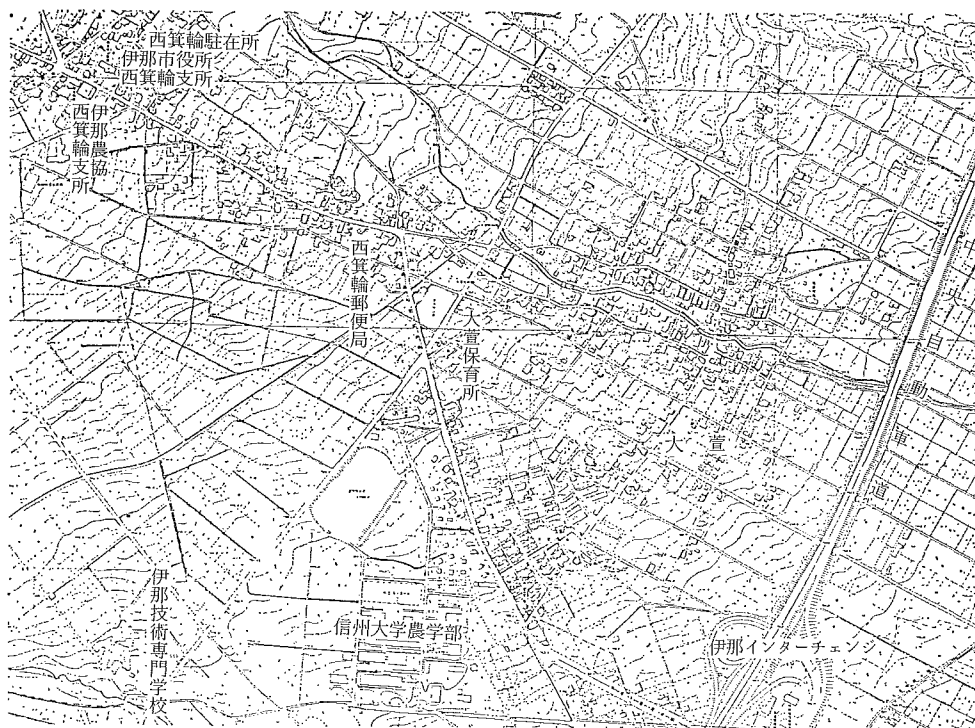


図-2 大萱集落付近の地図

昭和30年代，周囲に県営住宅や市営住宅，また昭和50年代中央道の開通とともに信州大学農学部 학생をおもな対象としたアパートなどができ，戸数，人口ともに急増しているが，集落の農家もしくは元農家にのみ対象を限定し，調査を行なった。

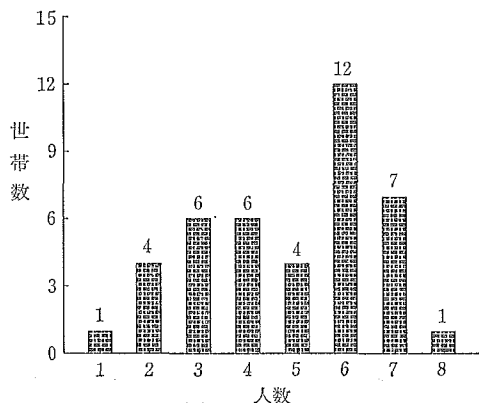
3. 結果及びその考察

1 家族構成と農業従事者

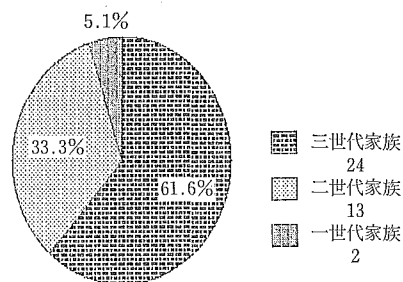
アンケートに協力してくれた世帯数は41戸，その中で農家は39戸，元農家は2戸であった。これらの世帯を構成する人数の総計は196人である。

世帯をなしているのは家族であるが，41戸の家族の人数構成は図一3に示されている。6人家族が最も多く，12戸，全体の29%を占めている。次に7人家族，そして3人家族と4人家族が続いている。家族の世代構成だが，調査結果は図一4である。三世代が同居している家族が過半数を越える61.3%を占め，一世代だけという回答はわずか5.3%にすぎない。これらの結果，核家族化の現象はこの集落ではあまり進行せず，おじいさん，おばあさんから孫まで一緒に暮らしているケースがぎわめて多いことがわかる。

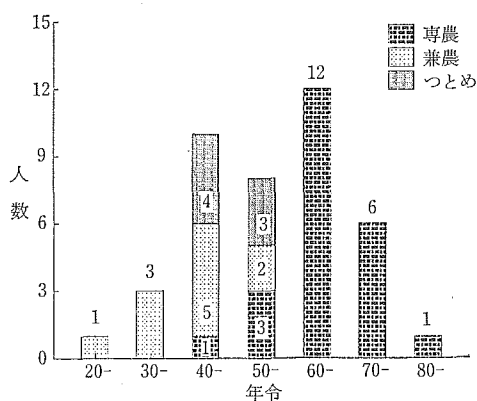
世帯主の年齢層は次の図一5に示されているが，40才台から70才台が多い。女性は1名である。41戸の家族全員の年齢構成は図一6である。20才台と40，50才台が少ない。その中で農業を専業にしている人は46人であり，男性は24人，女性は22人である。その年齢構成は図一7となり，50才以上がその大部分を占めている。特に最も人数の多い60才台では28人中22人，79%の人が農業を専業と答えており，この年齢層全体に占める割合が他の年齢層に比べると際だって高い。次に農業以外の仕事に従事している人を見ると，総計で61人，男性は37人，女性は24人である。その年齢構成を図一8に表示したが，全員が20才台から50才台である。各年齢層ごとに農業以外の就業者が占める割合を図一9でみると，若年齢層が高くなる傾向がみられる。男性は40才台までほぼ変わらないが女性には若年齢層ほど高い傾向がはっきりとみられる。農業を手伝っている人だが，総計62人，男性，女性共に31人である。その年齢構成をグラフにした図一10を見，さらに図一6と比較すると，男性では30才台，女性で



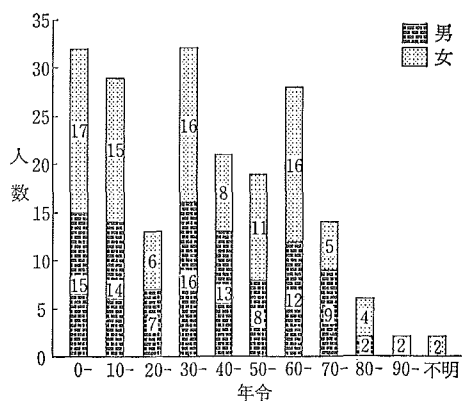
図一3 家族の人数



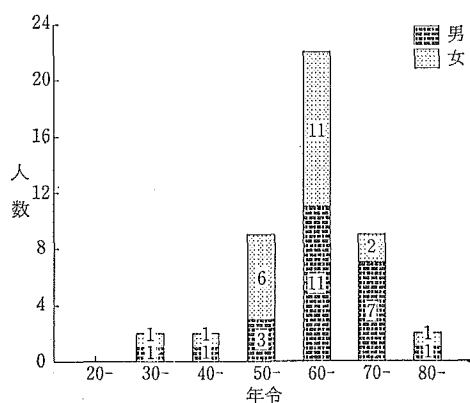
図一4 家族構成



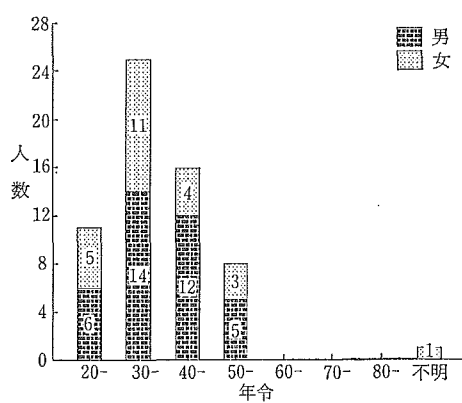
図一五 世帯主の年齢構成と農業従事



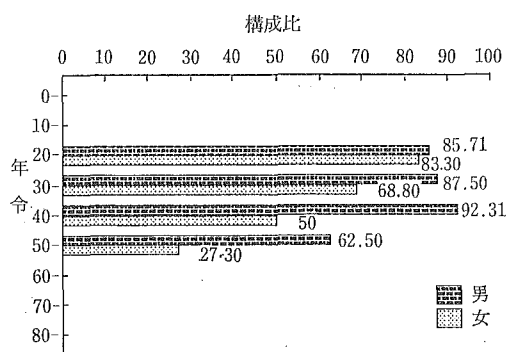
図一六 回答世帯全員の年齢構成



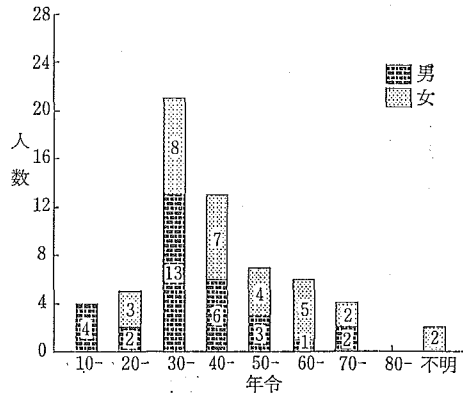
図一七 農業専従者の年齢構成



図一八 農業以外の従事者の年齢構成



図一九 農業以外の仕事に従事している人の占める割合



図一〇 農業を手伝う人の年齢構成

は40才台でその年齢層に占める割合が特に高くなっている。さらに農業を専業としている人と手伝っている人を合計し、全世帯の人数と比較したのが図一11である。一番多い60才台では全員が農業に従事しているように、高年齢者が特に従事しているのがわかる。

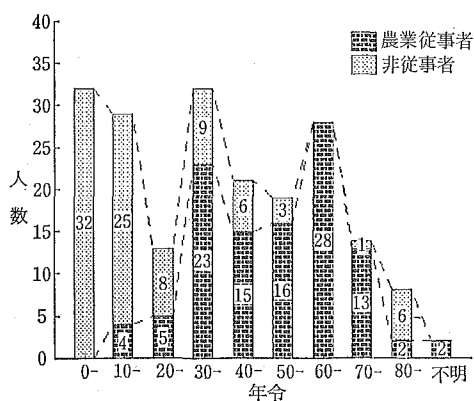
これらの結果、農業の主要な担い手は60才台を中心とする年齢層であり、その後の世代がそれを手伝っているという構図が明瞭に浮かび上がってくる。また、男性は40才台まで農業以外の仕事についている場合が圧倒的に多いのに対し、女性は年齢を経るにしたがい漸次この割合が下がっていく。そして50才台から農業を専業にして働く女性が増えてくる。これは子育てなどの家事労働を女性が担っているためにこのような結果が出たと考えられる。しかし農業に従事している女性は53人で、総農業従事者数のおよそ半分であり、農業を専業にしている人の46%、それを手伝っている人の52%を占めている。図一7、9、10を見ても男女の差はあまりない。それゆえに女性の農業に果たしている役割は男性と対等であることが窺いえるのである。

2 宅地と建造物

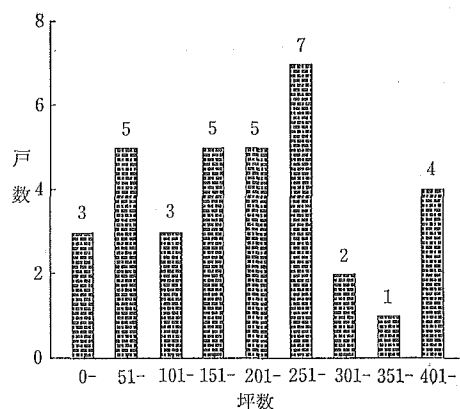
この地区は上記したように古い集落だが、宅地面積を集計し、グラフにすると、図一12となる。回答数35の中で151坪から300坪の面積を持つ世帯が全体の半数を占めている。

次に母屋の建築年代を整理すると図一13となる。この項の有効回答数39のうち、28戸、つまり2/3が現在使用している母屋を1966年以降に建築したと回答しており、この時期に特に集中していることがわかる。これに対して戦前に建てられた母屋を使用している例は4件しかなく、圧倒的多数の母屋が戦後、その中でも1970年代の高度経済成長期以降に建てられているのである。また現在の宅地に住み始めた年代だが、この項の有効回答数28の中で16戸が100年以上昔と回答しており、戦後と回答しているのは6戸にすぎない。集落の古さを物語る結果となったが、この中で住み始めた100年以上前の年代と母屋の建築年代がほぼ同じ（5年以内の差）ケースは戦前からあった4戸である。

付属家屋については、物置、作業小屋、農機具庫、車庫、蔵、薪小屋、外風呂、外便所、旧住宅などの有無、そしてその建築年代を記してもらった。アンケートに回答してくれた41戸に対し、付属家屋の所有は図一14のようになる。味噌蔵、畜舎、鳥小屋、桑置き場、離れ、



図一11 回答世帯全員の年齢構成と農業従事者



図一12 宅地面積

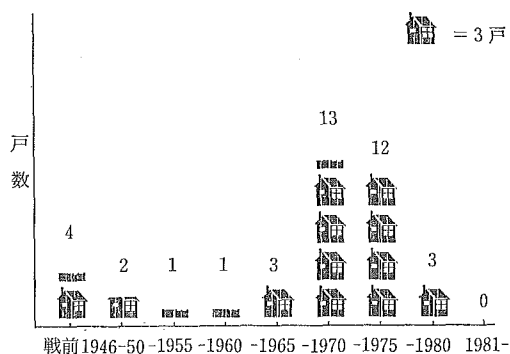


図-13 母屋の建築年代

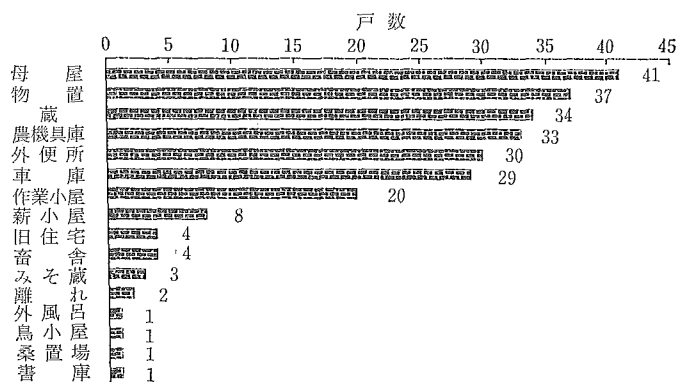
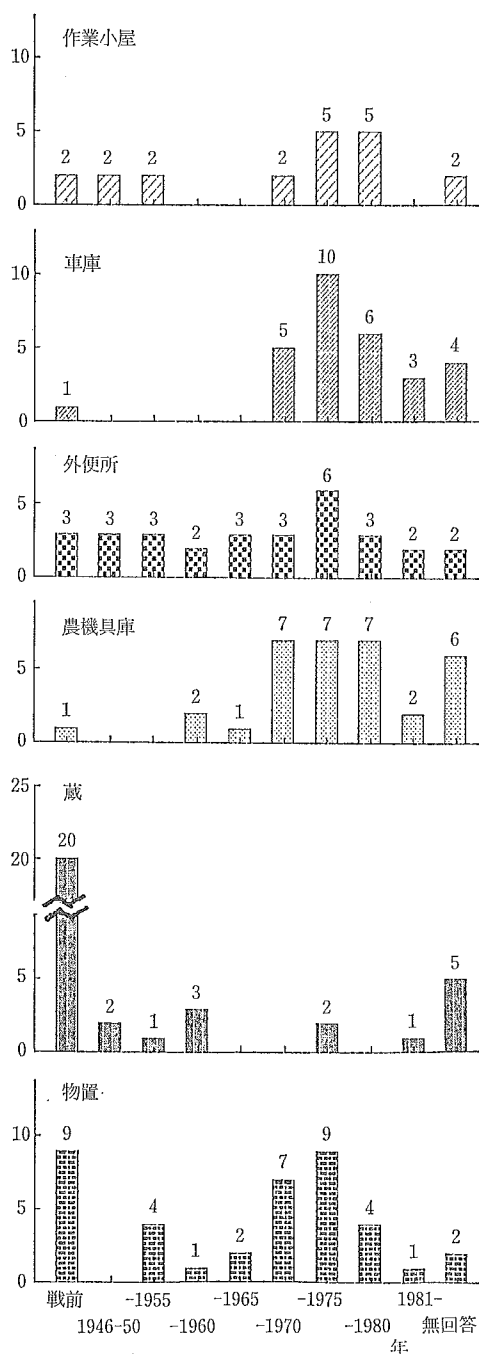


図-14 建物の建設戸数

書庫は「その他」の項目に記されていたものである。図を見ると宅地内によくある付属家屋と希な家屋の差がはっきりでている。物置、蔵、農機具庫、外便所、車庫が多く設置されているのに対し、薪小屋、畜舎、味噌蔵などは少ない。作業小屋はその中間、全体の半数の農家に設けられている。このことは現在の生活形態に置ける利用頻度、必要性の差が現われたのだと思われる。つまり、物置、蔵、農機具庫、外便所、車庫はよく利用されており、それ以外の付属家屋はあまり使われなくなっている事実を反映していると想定される。作業小屋は半数の農家にあり、まあまあ必要とされているといえる。次にこれらの利用されている付属家屋の建築年代だが、図-15となる。いくつかのタイプがこれから読み取れるのだが、まず古い時期に建築されたケースが多いタイプがあることに気づく。蔵は、2/3が戦前に建てられており、近年も少し建てられている。反対に近年建てられたケースがほとんどであるのは農機具庫と車庫である。1966年以降に大多数が建てられている。また各時期に分散しているタイプは外便所と作業小屋である。1970年代に建てられたケースが目立つが、まんべんなく分散しているといえる。最後に物置だが、分散しているのだが片寄りが強いタイプである。戦前と1966年から1975年が特に多い。総合すると、近年新たに作ったケースが多いのは農機



図一15 建物の建設年代

具庫と車庫であり、昔のものが残っているケースが多いのは蔵である。他のものは分散しているが、物置はその性格上古い建物を物置として利用する場合もあり、近年の建物と古い建物が特に多くなっている。

古い建物が多い蔵以外のタイプに共通している点は1966年以降に多くの建物が建てられていることである。これに図一14を重ねてみると母屋の建築年代の傾向と一致するのがわかる。そこでこの時期に建築された家屋すべてを見渡すと、母屋が建てられた同年かあるいはその前後5年の間にいずれかの必要な付属家屋が建てられている場合が28戸中22戸もあり、きわめて多いことがわかる。つまり、この場合は宅地全体にわたって建物の建設が起ったのであり、その結果、宅地内の建物の配置に大きな変化を生じさせた可能性が強い。この結果庭の空間も場所が削られたり、増えたり、二分されたり、あるいはまったく場所が移動されるという影響を被ったことが充分に考えられるのである。

3 庭

家の敷地内に庭木を植えるなど庭を作っている住宅は非常に多い。この傾向は農作業が主体であった農家の庭においても顕著で、大萱集落で庭について回答をよせてくれた40戸のうち庭の有無について尋ねたところ、無回答3戸をのぞく37戸中36戸が庭が作られていると回答した。このように農家の庭においても敷地内に庭木を植え、庭を作ることは日常的なものである。以下、40戸を分析の対象としていく。

1) 庭の構成要素と制作者

庭のなかでは、高木や低木、飛石や石組、石灯籠、さらに築山や池といったよ

うに様々な構成要素が組み合わされ、各家ごとの様々な姿を個性豊かに作り出している。このような構成要素を明らかにし、大萱集落の庭の特徴を考えていく。

アンケートに回答してもらった10の構成要素(池、庭石、灯籠、築山、手水鉢、陶器置物、噴水、庭木や草花等の植え込み、彫刻、その他)について検討した結果、このうち主に4つの要素が庭の構成に関与していた。これらは、庭木や草花等の植え込み、庭石、築山、池の4つでこれらが次々と加えられ、複雑な構成となっていく。4要素で分類した様子を表わしたのが図-16で、ここでは<A>;庭木や草花等の植え込みのみ、;庭木や草花等の植え込みと庭石、<C>;と築山、<D>;<C>と池の4つで分けた。その結果、図-16にみられるようにどのタイプも比較的均等で、庭が単純なものから複雑なものまで、多様な形で構成されていることがわかった。

つぎにこうした庭の構成要素がどのような意識に基づいて配置されているかを調べるため庭の形式について調査したところ、洋風庭園を意識しているとした家はみられず、自然風庭園と和風庭園のふたつの形式で庭を意識していることがわかった。この意識の違いを考えるため、実際にその庭園を制作した人について尋ねたところ、家族が庭づくり行なった場合と全て業者任せにした場合の2つの場合がみられた。そこで、庭の形式と庭の制作者の関係について調べたところ、図-17のようになった。この図からわかる通り和風庭園を意識する場合は、業者によって作られたものが多く、自然風庭園を意識する場合には家族の協力によって庭が作られていることがわかった。

以上のことから庭の構成要素では4種類が特に重要であり、その組合せで多様な庭が作られているといえる。また、庭の制作にあたって家族が行なった場合と業者に任せてしまった場合とでは、庭園の形式に対する意識が異なっていることがわかった。

2) 庭木の樹種構成

庭の構成要素の中でも前述のように庭木はすべての家で植えられており、身近な存在である。そこで敷地内にみられる庭木の樹種について調べたところ、全体で延べ70種類を越える様々な種類の木が植えられていた。各家ごとの本数の分布も図-18のように様々で、20本以下、61-80本の2つの層でいくぶん多いものの際だった特徴とはいえず、本数の少ない庭から多い庭まで幅が広い。最も本数の少ない庭には11本植えられていた。一方、種類数は図-

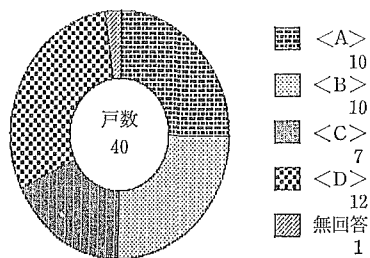


図-16 庭園の施設

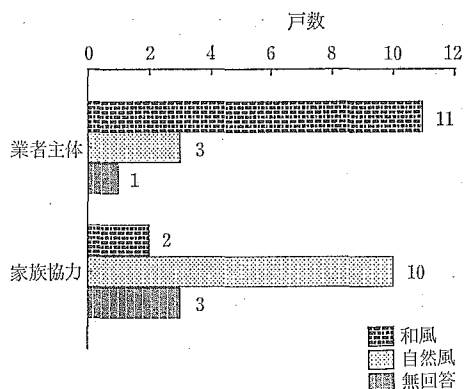


図-17 庭の特徴

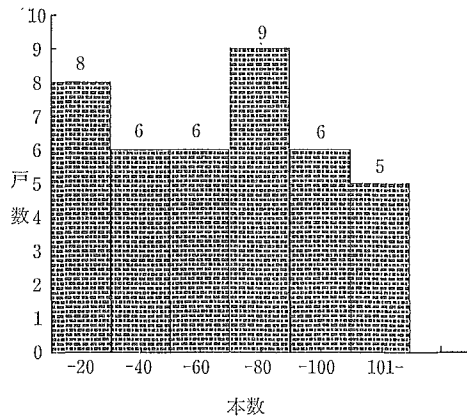


図-18 樹木の本数分布

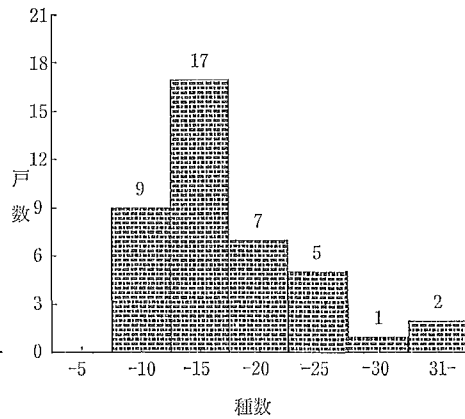


図-19 樹木の種数分布

19のようになり、最も種類数の少ない家でも6種類は植えられて、最も多い家では36種類に達しているが、11—15種類の木を植えていると答えた家が最も多く、半数近くの家がこの範囲に含まれた。

次にその個々の樹種についてだが、アンケートの回答のうち4分の1（10軒）以上で植えられているものをよく植えられている種類と考え、これらをもとに庭木の傾向を調べた。その際、アンケートで行われた区分にしたがって庭木を高木、低木、果樹の3つに分け、表一1のような形で表わした。この表からみると、10軒以上の家で植えられている種類としては、高木ではイチイ、マツ（アカマツ、クロマツ）、サワラ、サクラ、ヒノキの5種類、低木ではツツジ（サツキを含む）、ドウダンツツジ、カエデ、バラ、ナンテン、アジサイの6種類、果樹はウメ、カキ、クリ、アンズ、の4種類で、樹種の合計は15種類であった。この中から特に20軒以上（半数以上）の家で植えられている樹種を抜き出すと、イチイ、マツ、サワラ、サクラ、ツツジ、ドウダンツツジ、カエデ、バラ、ナンテン、アジサイ、ウメ、カキの合計12種類であった。

次に高木、低木、果樹のそれぞれの樹種の特徴を検討した。高木では、表一1に示された通りよく植えられているものは5種類であるが、このうち4種類が常緑の針葉樹で、この他にも、スギ4戸、ツゲ3戸、コウヤマキ2戸などと全部で40種類中17種類に及ぶ常緑の針葉

表一1 よく植えられている庭木

高 木				低 木				果 樹			
種 類 名	軒 数	種 類 名	軒 数	種 類 名	軒 数	種 類 名	軒 数	種 類 名	軒 数	種 類 名	軒 数
イ チ イ	37	ツ ジ ツ	39	ウ	メ	31					
マ ツ	26	ドウダンツツジ	39	カ	キ	28					
サ ワ ラ	21	カ エ デ	35	ク	リ	16					
サ ク ラ	18	バ ラ	32	ア	ン	ズ	11				
ヒ ノ キ	13	ナ ソ テ	31								
		ア ジ サ イ	29								

樹が植えられていた。また回答のあった家のうち、常緑の針葉樹を植えていない家は2軒しかみられず、高木では常緑針葉樹をよく植えていることがわかる。この他では、常緑、落葉を問わず花の美しい木(花木)が12種類が植えられていたものの、サクラ18戸、モクレン5戸、サルスベリ3戸の3種類の他は複数の家で植えられているものはない。また回答に花木が書かれていなかった家は17軒と4割を越えていた。花木を植えていると回答した家においても複数の種類を植えている家は8軒と2割にとどまり、種類が多く見られた割にあまり植えられてはいないようである。これらのことから高木には常緑針葉樹を植え、庭の中に四季を通した変わらない安定感を演出していると思われる。

次に低木だが、表-1をみればわかるようにツツジ、ドウダンツツジといったツツジ類のほか、バラ32戸、アジサイ29戸といった花木類がよく植えられていることがわかる。また、カエデ35戸のような紅葉を楽しむ木やナンテン31戸のように葉と実を楽しむ木もよく植えられている。しかし常緑針葉樹は上位から姿を消し、ツゲ3戸の他は複数の家で植えられているものはなかった。このような低木の中でツツジ類は、図-20にみられるように低木本数中に占める割合が大きい。低木のうちその本数の半分以上をツツジ類が占めている家は33戸と80%を上回り、特にツツジ類の比率が80%以上を占めている家も15戸と40%近くあった。一方ツツジ類の比率が20%以下と低い家は1戸もみられなかった。このようなことから低木ではツツジ類が数多く植えられていることがわかる。以上のことから低木の特徴をまとめてみると、ツツジ類に代表されるような花をつける木と紅葉する木に人気が集まっている。また低木の中には初夏に花をつけるアジサイや冬を彩るナンテンなどが植えられており、それぞれの家ごとに四季を通じて彩りを楽しむために工夫をこらしている点が明らかとなった。

最後に果樹についてであるが、図-21をみればわかるように大半の家では1-5本であり本数が多いとはいえない。高木や低木ではよくある11本以上植えている家は8戸しかなく最も果樹を植えている家でも24本であった。種類数についても最高で11種類と高木や低木に比べかなり少ない数字である。表-1からみたよく植えられている樹種は、ウメ、カキ、クリ、アンズの4種類であった。またこのほかではモモ7戸、スモモ5戸、ナツメ5戸などが植えられていた。このようなことから、果樹は36戸(9割)の家で植えられているもののそ

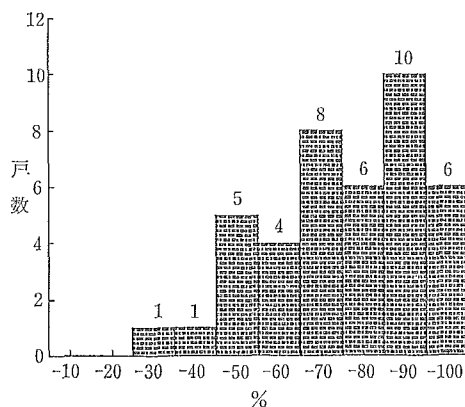


図-20 低木中のツツジの割合

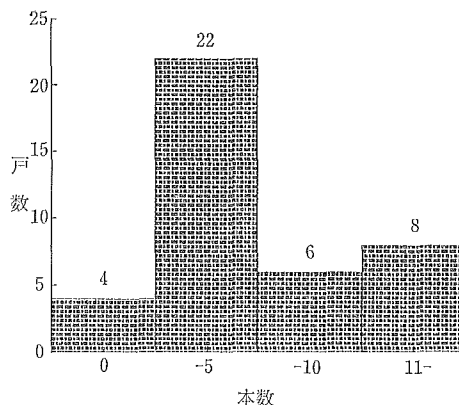


図-21 果樹の本数分布

の数は少なく、脇役的存在と思われる。

以上をもとに庭木全体の特徴をまとめてみると、高木で安定感を作り出し、低木によって庭に四季の彩りをつけ、果樹は脇役的に存在しているといえる。

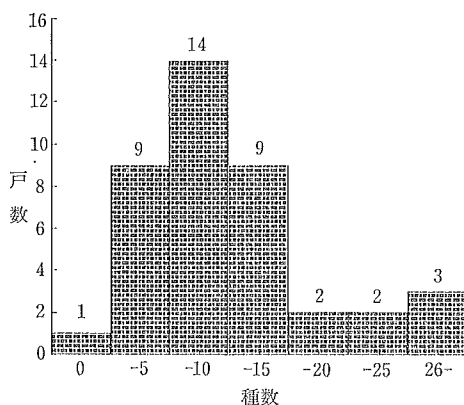
3) 草花の栽培形態

庭に草花を植えると庭の彩りや鮮やかになり、華やかさを与えてくれる。特に鮮やかでカラフルに美しくみせるように改良された園芸用の草花が咲いていると、華やかさがより顕著に現われてくる。今回の調査では、アンケートを回収した41戸のうち39戸で草花があるとの回答が得られ、草花も庭木同様よく植えられていた。

草花の種類は70種類を越え、実に様々な種類が植えられている。各家ごとの栽培種数は図一22のようになり、最高で37種類もの草花を栽培している家があった。なお一戸当りの平均栽培種数は10.7種類であった。またよく植えられている種類について調べたものが表一2である。ここでは栽培戸数の多いものから上位10種類をまとめたが、これ以外で目立ったものとしてはダリア15戸、ラン11戸、スイセン9戸などであった。ひとつひとつの種類を見てみると、外国原産のチューリップやマリーゴールドといった花が主流となっていることがわかるが、キク（34戸、第1位）、アヤメ（28戸、第3位）といった日本に古くからある種類も多くの家で植えられていた。しかしキクにしろアヤメにしろ古くから庭の植物として利用され、品種改良がすすんでいた種類であることから、草花は園芸用に改良されたものがよく利用されているといえる。

また草花は花が咲くときが最も美しいため、それぞれの家で草花を植える際には花の咲く時期を考えて選んでいると想定され、よく植えられている草花についてその花の咲く時期を調べてみた。園芸用の草花には花の咲く時期が長くなるように改良された四季咲きと呼ばれるものが数多く存在しており、今回の調査でも四季咲きと思われる種類が見受けられたが、チューリップやクロッカス、ヒヤシンスといった春に花をつける春咲きの花のほか、夏咲きの花であるユリやアサガオ、サルビア、秋咲きの花であるコスモス、キクといった季節感のある草花も多くみられた。

また、イカリソウ、エビネ、アツモリソウのように、俗に山野草と呼ばれている草花を植



図一22 草花の栽培種数の分布

表一2 草花の栽培戸数

順位	種類	戸数
1	キク	34
2	チューリップ	31
3	アヤメ	28
4	コスモス	27
5	ヒヤクニチソウ	26
6	マリーゴールド	26
7	クロッカス	23
8	ホウセンカ	20
9	サルビア	19
10	ヒヤシンス	18

表-3 庭木と山野草の関係

庭木の本数	山野草を植えて	
	い る	いない
101—	6(戸)	2(戸)
51—100	5	13
21— 50	0	10
0— 20	1	3
計	12	28

庭木の種類	山野草を植えて	
	い る	いない
30—	2(戸)	0(戸)
20—29	5	0
16—19	4	2
11—15	0	15
—10	1	11
計	12	28

えている家がみられた。アンケートによると山野草を栽培している家は全体の30%に当たる12戸あった。山野草を植えている家の特徴を引き出すため、表-3のように山野草と庭木の間関係を山野草を植えている家と植えていない家とで比較して調べた。これを見ると山野草を植えているほとんどの家で16種類以上の庭木を植えており、1戸当りの庭木の栽培種数である14.0種を上回っていることがわかった。一方、山野草を植えていないと答えた家では20種類以上の多くの庭木を植えている家はなく、平均栽培種数を越えた家は28戸中わずか3戸であった。また山野草と庭木の本数についても同様に比較してみた。栽培種数の時のような明確な差はあらわれてこなかったが、山野草を植えている家の大半が50本以上の庭木を植えており、全体の半数に当たる6戸が100本以上の庭木を植えていることがわかった。こうした100本以上庭木を植えている8戸全てについて調べたところ山野草を植えていない家は2戸であった。このようなことから山野草を栽培している家は庭木にも強い関心を示し、多くの種類をたくさん植えていることがわかった。

つまり草花は庭の四季の彩りとして品種改良をした園芸用の草花を主体に季節感のあるものと花期の長いものを季節で花の途切れない組合せによって植えているといえよう。また山野草を植えている家も3割ほど見られ、これらの家では庭木も多かった。

4) 庭の手入れについて

庭木や草花は庭のような人間の手を加えた空間ではこまめに手入れをしてやらなければ不都合が多く生じてしまう。そこで庭の手入れについて庭木と草花の両面から調査した。

庭木の手入れは大きく分けると形を整えたり高さや形を制限するために行う剪定や、肥料を蒔く施肥、病害虫の駆除の3つがあげられる。図-23はこれらの手入れについて表わしたものであるが、何らかの手入れをすると答えた家は40戸中34戸と8割を越えた。その内容については剪定を行う家が最も多く30戸、次いで施肥の14戸、病害虫の駆除の12戸となっている。剪定、施肥、病害虫の駆除の3つとも行っているという家は7戸で、剪定、病害虫の駆除を行っていると回答した家の半数に当たる。なお15戸は剪定のみであった。また、施肥や病害虫の駆除はそのほとんどの場合家族が行っていたが、剪定については庭木を枯らさないために専門的な技術が必要とする樹木もあることから、剪定を行うと回答した家(無回答の2戸を除く28戸)のうち、半数に当たる14戸で業者に剪定をしてもらっていることがわかった。つまり、庭木の手入れにおいては剪定を除いて家族で行なっている。庭木の手入れと庭木の

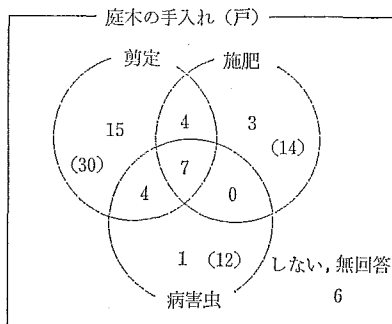


図-23 庭木の手入れ

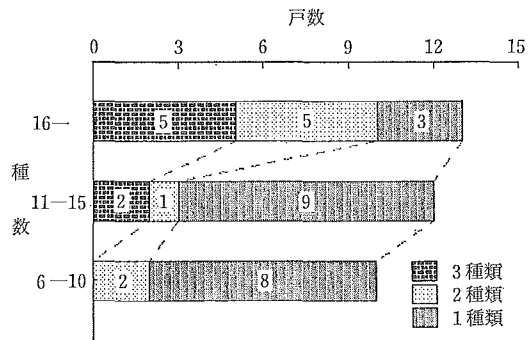


図-24 庭木の種数と手入れ

所有本数との間には、図-24に見られるようにいろいろな手入れをしている家ほど種類数が多いことがわかる。

一方草花の手入れには大きく分けて除草、施肥、病虫害の駆除の3つがある。この項について回答してくれた家は32戸であり、グラフにすると図-25のようになった。手入れをしていると答えた家は約8割に当たる29戸で、その内容では除草が25戸で最も多く、ついで施肥の20戸となっている。除草、施肥、病虫害の駆除の3つとも行うとした家が12戸あることから、草花には比較的こまめに手入れをしていることが推測された。草花の種類数と手入れとの関係についても庭木と同様に調べたところ、図-26にみられるように、草花の種類が多いほど除草、施肥、病虫害の駆除の3つの手入れをすべて行っていることがわかった。草花の種類数の少ない家（0-5種類）においては無回答が多かった。また、どの家においても実際に手入れをしていた人は男女を問わず農業に携わっている人が中心であった。

植栽全体についての手入れをまとめてみると、庭木にしる草花にしる種類の多い家ほど庭の手入れに関心を示し、こまめに手入れをしていた。

5) 庭の形態と機能

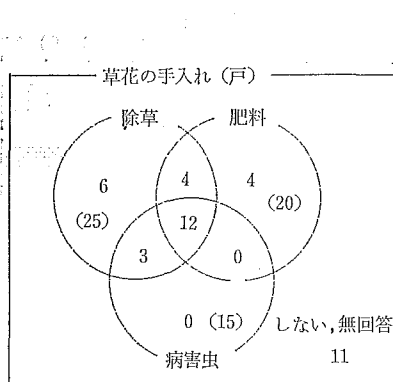


図-25 草花の手入れ

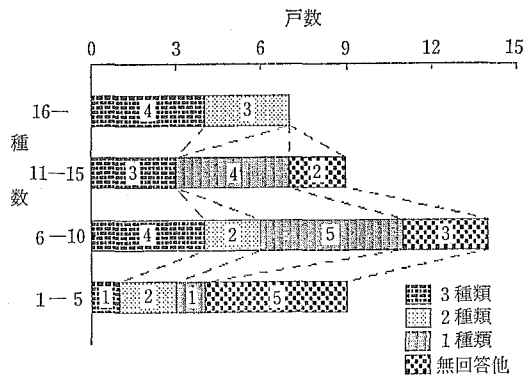
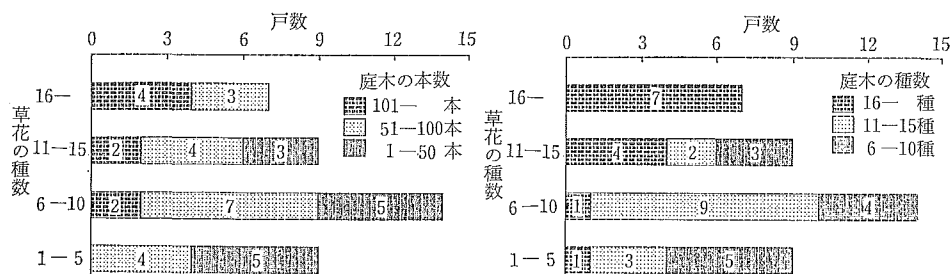


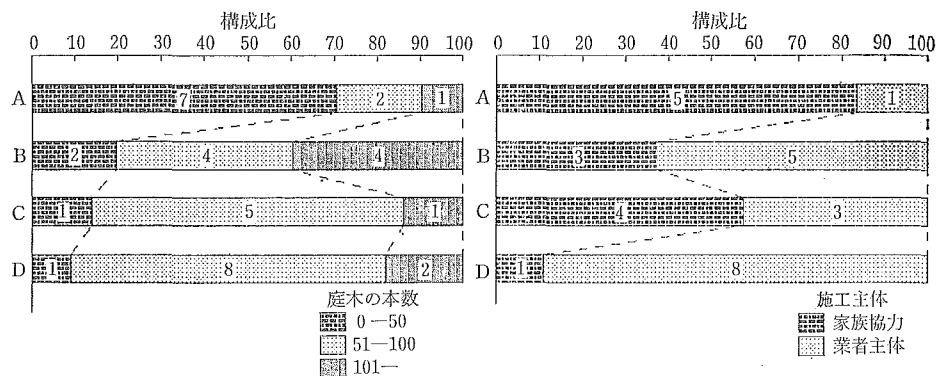
図-26 草花の種数と手入れ

草花と庭木との相互関係について、図一27のように草花の種類数をもとに庭木の本数、及び庭木の種類数と比較した2枚の図でまとめて表した。この図から草花の種類が多いところでは、庭木の本数や種類数が多くなっており、一方草花の種類が少なくなれば庭木の本数や種類数が少なくなる傾向にあった。つまりこの地区の農家の庭においては、庭木と草花のどちらかを重要視して植え込む傾向はみられず、両者の間に一定の傾向、すなわち比例関係が存在していることがわかる。

なお庭木はどの家でもみられることから、庭木と庭の関係を調べた。図一28は庭木の本数と図一16で述べた〈A〉から〈D〉までの庭のタイプとの関係を調べたものであるが、〈A〉型は、庭木の本数が50本以下であることが多く、簡単な庭となっている。〈B〉形については100本以上の本数を植えている家が多いことから、植物好きな人が多いと考えられる。庭石だけで、山や池をおかず平坦面に植物を主とした庭を構成している。〈C〉〈D〉型は庭に池や山といった起伏をつけることから庭木の本数ある程度にとどめ、庭の起伏の変化を楽しんでいると考えられる。また庭の構成要素と施工主体との関係を表わしたものが図一29だが、〈A〉型が家族が協力することによって庭作りをしている一方で、〈D〉型は、家族の手を離れ、業者任せになっていることがわかるほか、両者の混在化した形として、〈B〉〈C〉型の二つがみられる。庭の構成要素と庭の形式の関係については、施工主体と形式の関係について述べた図一17と先ほどあげた図一29とから、〈A〉型の家では、自然風の庭園を意識し、〈D〉型の家では和風庭園を意識しているといえることができる。



図一27 草花の種類からみた庭木



図一28 庭のタイプと庭木の本数

図一29 庭のタイプと施工主体

表一4 庭 の タ イ プ

要 素		地 形	庭 木	制 作	形 式
A	植 物	平 坦	少 な い	家族協力	自 然 風
B	庭 石		多 く 植栽中心	混 在	混 在
C	築 山	起 伏	あ る 程 度 多 い		
D	池				

このようなことから大萱集落の庭について庭のタイプを元に表一4のように分けた。この表にみられる通り、大萱地区の庭の姿は4通りに分けられる。まず第一に、植物のみによって構成されている庭で、自然風を意識し家族が協力して庭作りを行

なっているが、庭木の本数は少ない。次に、平坦面に庭木を数多く植え、植物を楽しんでいる庭であるが、庭の制作には家族の協力するものと業者主体のものとが混在している。さらに庭に起伏をつけて山を築いた庭で、庭木の本数がある程度多くなっている。しかしこのタイプにおいても庭の制作は両者が混在している。最後に、池を築いた庭で、このタイプにおいては家族が庭作りに協力することはなくなり、業者任せになる。このため庭に対して和風という意識を持つものが多くなっている。

6) 庭のイメージ

各家ごとの庭についてのイメージをまとめたところ、庭を憩いの場であると考えている人が数多くみられた。農作業の場として中心であった農家の庭は大きな変化を被っている。

それではこうした変化はいつ頃から起こってきたのだろうか。庭が整備された年代について調べてみた。その際、図一13であげた母屋の建築年代についても参考までに含め、庭の様子についてみることにした。図一30は母屋の建築年代、庭木等の植え込みを整備した年代、築山や池を整備した年代の3つについて表わしたものである。これによると、古くから庭木等を整備した家も比較的多かったものの戦後になってから整備したという家が多く、中でも1966年から1975年までの10年間に整備したという家が16戸と非常に多いことがわかる。一方築山や池といった立体的な整備を行った年代では戦前とした家は少なく、そのほとんどが1966年以降であることがわかる。このように農家の庭の整備は比較的最近になって起こってきているが、このことから機械の導入などでゆとりのでてきた農家の人々が憩いを求めて庭を制作し、農作業の合間に自分の好きな庭いじりを行なっているといえよう。

4 宅地の境界

宅地の境界にはいろいろなものが見られる。生垣やブロック塀ばかりではなく、その基礎として用いられることも多い石垣、また高生垣や屋敷林、頭上に覆いかぶさるばかりの樹木もある。さらに草花が添えられていることもあるし、境界を示す杭を打っていることや、とくに境界のはっきりしていないこともある。しかもそれらの高さは一定ではないし、出入口になっている所には門がある場合、たんに境界の区切りの途切れているだけの場合がある。このように宅地の境界にはまことに多様な形態があるのだが、今回のアンケート調査では質問が複雑にならないように東西南北の各境界は何と接しているか、そしてそこをどうしているかを回答してもらった。集落の宅地割りはいだいたいのところ東西南北を向く方形をとっている場合が多いので、その各方面の境界にある主要なものを書いてもらったのである。詳細は今後の実態調査を待たねばならないが、そのおおよその傾向は把握できると考えられる。

まず宅地が接している空間だが、結果は図一31となった。複数の回答があるため、回答数

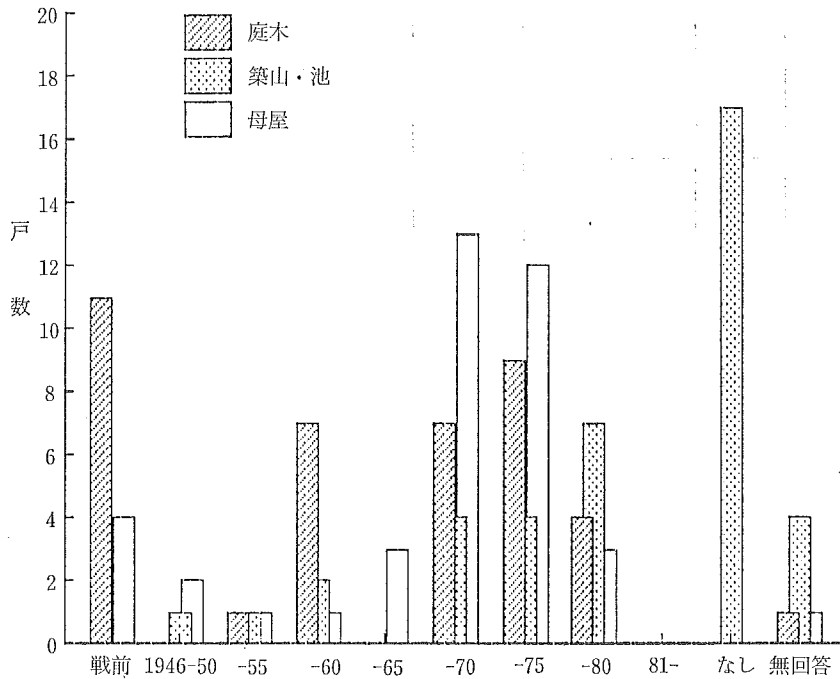


図-30 歴史的にみた庭の施設

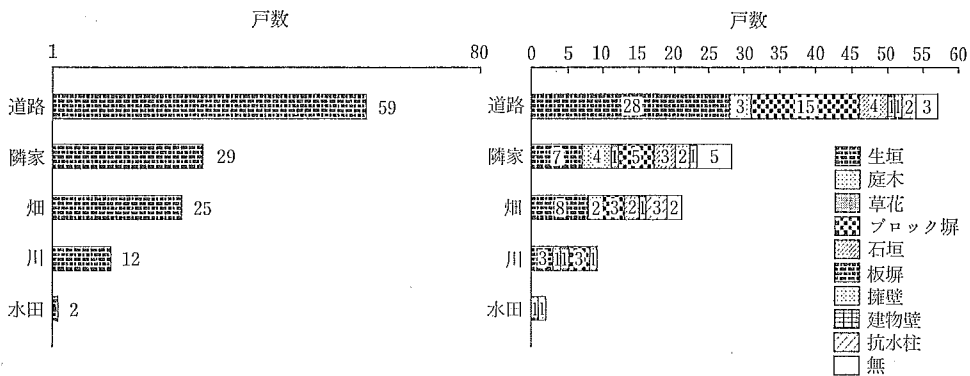


図-31 敷地の接している空間

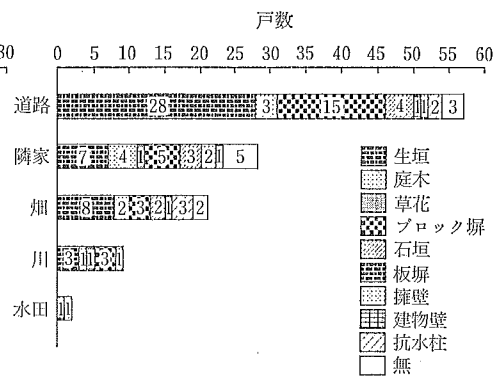


図-32 境界を構成している要素

が127であるが、それらを同等に加算したものである。道路と接しているケースが最も多く、全体の46%を占めている。隣家と畑がそれに続き、川と接しているケースはさほど多くはなく、水田と接しているケースは少ない。

さて次にそれぞれの場合ごとに境界を構成している要素を集計したのが図-32である。まず道路の場合だが、生垣を作っているケースが28例と圧倒的であり、不明をのぞいた回答の

中では約半分を占めている。二番目に多いのはブロック塀であり、15例、26%を占めているが、生垣の半分にすぎない。これらの二例が道路に接する場合に特に目立っているが、次に隣家に接する場合を見るとこれとは違った傾向が読み取れる。生垣とブロック塀は確かに多いのだが、道路の場合のように目立たない。他よりは多いといった程度であり、庭木を植えているケースも多く、また特になにもおいていないという回答も多い。畑の場合に目を転じると、生垣だけが抜きん出ており、他のケースはほぼ同等である。川に接している場合は生垣とブロック塀が多く、水田の場合は生垣と庭木である。

これらを通してみると、宅地の境界におかれることが多いのは生垣とブロック塀である。すでに述べたように道路に面したところではこの2要素がけた違いに多いが、これらに共通する特徴は境界の線を明確に強調し、しかもつくりやすいことである。またこれら2要素を比べると、人間に与える印象は生垣の方が柔らかく、暖かいものであるし、また見栄えもよい。その結果生垣が一番よく使われているのだと思われる。次に隣家と接している場合だが、ここでは境界線が必ずしも目に触れなくともよいし、目立たせる必要もない。そこで草花という例があるほど多様なケースが生じるのだと考えられる。畑と接している場合には境界に生垣を作るのが圧倒的に多いのだが、隣地が畑という性格上、境界線を強調する必要はないが、なんらかの区分けをしなければならない。そこで柔らかい印象を与える植物を使った仕切り特に生垣が使われるのだと思われる。川と接する場合にもやはりこれらの2要素が多く、水田は畑に準じていると考えられる。

以上のように宅地の境界を調べると接している空間により境界を仕切るものが異なる傾向を持つことがわかる。農村でみられる特徴の一つに農地と住居が接していることがあげられるが、大萱においてもこの特徴を持っている例が多い。その境界に多く使われているのが生垣なのであり、図-32全体を通してても生垣が一番よく使われているのである。また、道路と接している境界では生垣とブロック塀が特に多く使われており、他の空間と接している境界とは明らかに異なっている。それは道路の性格が変化してきた、つまり例えば集落内部を走る道路でも集落の外部からきた自動車も走り、集落内部の空間からより外部に開かれた空間へと性格が変化していく、そのことが境界線を明確にするばかりでなく、空間を遮断するような形の生垣やブロック塀を作る大きな要因になっているのではないかと想定されるのである。

4. 総 合 考 察

大萱集落のほとんどの農家で母屋の建設を近年行っているが、これは過去の農家住宅から生活重視の住宅への改良と考えられる。これに伴って他の付属建物の建設も行っている場合が多いが、車庫などは自動車の普及によるものであり、農器具庫は農業生産面での機械の普及によるものであり、過去には無かったものである。単に建て替えと考えられるのは外便所や作業小屋であり、宅地内の建物配置上の必要と考えられる。また、古い建物を保存しているのは蔵であり、必要が無くなりわずかしかのこっていないのは畜舎や薪小屋である。農家庭として過去には農作業や社交の場であり、住宅とは縁側でつながっていたものが、縁側を

作る住宅も少なくなり、生活や趣味の場として施設や植栽がなされている。しかし、農業は持続させており、より集約した形で作業小屋や農器具庫が配置されている。

趣味的な庭園として農家庭が作られたのも、住宅建設の時期と関連している。古く農家の趣味的な庭園は座敷庭など小規模に作られているところもあるが、大萱集落の農家ではこうした古い庭は無かったか、ほとんど意識されなかったようである。ここでは回答のあった農家のすべてに趣味的な庭づくりが存在している点が、画期的な農家庭の形態の変化であったといえる。そしてこの庭づくりが日曜庭仕事として素朴な形で出発していることが、4タイプの庭園が見られることからわかる。すなわち、庭木と草花、庭石、築山、池の要素が次々加えられた4タイプである。庭木と草花だけのタイプが最も素朴なものであろう。現代的な住宅に即応した洋式の庭園はみられず、自然風庭園と意識されており、業者に庭づくりを委託する段階で和風庭園と意識されるようである。

そして、この庭づくりが、植物の栽培を専門知識とする農家の人々によって行われている点で、庭木や草花の種類や数が豊富であり、手入れにも専門的技術で行われていると考えられる。しかし、数十種以上の庭木や草花となってくると、植物の収集の趣きが強くなってくる。庭園の要素や材料として植物が配置されているかどうかは、実態調査によらねばならないが、庭石、築山、池などの存在は少なくとも庭園に眺めを意識していることはまちがいない。また、庭木に針葉樹が多く使われていることは、冬の眺めが意識されていることであろう。もちろん、花木や草花も美しい眺めを意識しているにはちがいないが、そのあまりの多様さは収集趣味が強調されるということである。最近のブームの山野草の趣味も見られるが、農家にとっては周辺の自然に自生しているものであり、周囲の環境の意識と関係するもので、庭の眺めとしては自然の趣きを構成する要素である点、栽培されている草花とは相違し、自然風庭園と呼ぶにふさわしいものであろう。こうした趣味の庭も見掛けられた。このように趣味的な眺めの庭園が重視されているが、一方、古く農家の景物となっていたカキの木などが少なくなっており、実用性からは遠ざかっているのではないか。生活の場と趣味の場、また、作業の場が隣あって混乱しているようにも見られるのである。しかし、こうした様々な場が家族の構成員のそれぞれの持ち場となっているとも考えられるので、庭の利用の多様さと家族の活動の多様さを物語っているかもしれない。

個々の農家庭が外部とどう接しているか、外部にどう対処しているかは宅地の境界の状態からわかる。大萱集落は集村であるので、空間的に農家庭相互に隣接している。こうした集落では過去には集落内の住人は長く親しんでいる人々であり、隣や道路に対して境界の障害物を設けることは必要が無かっただろう。集落の道の辻が広場に使われ、その周囲の農家も垣根は無かったそうである。ところが、現在は新たに住宅が増加し、道は自動車交通によって占領され、広場や集落住民の共同の場では無くなった。その現れとして道路に面して生け垣ブロック塀などを作り、庭を囲いこむようになった。しかし、まだ隣家や畑との境界は何もなかったり、しるし程度のものである状態が残っている。宅地の大きさは一般住宅に比べれば、150坪、300坪といった大きな面積であるが、いくつかの付属建物が配置されている点で庭園部分はそう大きくはとれない。そこで、2、3の事例であるが、隣接する畑地を宅地の中にその周囲を生け垣などで囲い込み1,000坪程度の広大な面積にしている所も見られる。庭園の趣味の拡大と農地の価値の低落は農家庭にこうした傾向を拡大していくかもしれない。

い。

最後に、今後の展開であるが、農家庭の外観実態調査を行い、アンケート調査結果との関係を明らかにしていくことを考えている。また、事例地として山間地域の集落を取り上げ、自然環境と連続した農家庭の姿を明らかにしたい。屋敷林などを持つ散村集落の農家庭、都市近郊で市街の中に残っている農家庭など様々な姿が見られる点、農業の状況による周囲の景観の変化との関係の点、農家の家族、生活、建物の変化との関係の点など、体系的に取り組む必要があり、他の地域、他の分野にわたる共同研究の必要を痛感している。

この研究が第一段階ではあるが、なんとか纏めることができたのは、1987・1988年度の信州大学農学部造園演習を受講した学生の努力によるところが大きい。20人以上に及ぶので一人一人名前を上げることができないが、感謝したい。その学生の中から小山泰弘君がこの研究の分析を中心になって進めた点で、筆者の一人であるが、とくに指摘しておきたい。執筆は、伊藤が、はじめに、1 調査の目的と方法、4 総合考察を、佐々木が、3-1 家族構成と職業、3-2 宅地と建物、3-4 宅地の境界を、小山が3-3 庭を分担している。表と図面のすべてを小山が作成した。

参 考 文 献

- 1 信州大学農学部造園学研究室、農家庭に関する予備調査—南箕輪村沢尻地区を事例として、1987
- 2 秋山 健、農家屋敷の研究、昭和60年度信州大学農学部造園専攻研究、1986
- 3 田村 剛・森敏之助、小住宅の庭園設計、地球出版、1951
- 4 江山正美、スケープテクチュア、鹿島出版会、1977
- 5 江山正美、庭の文化史、総合出版
- 6 杉本尚次、日本民家の研究、ミネルヴァ書房、1969
- 7 中島道郎、農用林概論、朝倉書店、1953
- 8 藤井英次郎・和田和寿、農村空間の構造と特性に関する研究、千葉大学、1983
- 9 筒井義富、農家宅地空間の構造に関する研究、現代ハウジング論、学芸出版社、1986
- 10 斉藤輝二、居住様式と住宅計画、現代ハウジング論、学芸出版社、1986
- 11 中村民也、共同空間としての集落、現代ハウジング論、学芸出版社、1986
- 12 渡辺光雄、農地生活論、農村計画論、農山漁村文化協会、1984
- 13 嘉田由起子、農家の兼業化と直系家族、エスプリ No. 203、1984
- 14 富田祥之亮、変貌する農村、エスプリ No. 203、1984
- 15 伊那市史編纂委員会、伊那市史現代篇、伊那市史刊行委員会、1982
- 16 伊那市史編纂委員会、伊那市史自然篇、伊那市史刊行委員会、1981
- 17 南箕輪村誌編集委員会、南箕輪村誌、南箕輪村誌刊行委員会、1984

V. 26, 1. 2号

訂 正 表

	誤	正
139 ^ア -ジ 16行	40 <u>種類</u> 中	40 <u>種類</u> 中
147 ^ア -ジ 下から5行	農 <u>器</u> 具庫	農 <u>機</u> 具庫
148 ^ア -ジ 2行	農 <u>器</u> 具庫	農 <u>機</u> 具庫